



樹蔭静けさ

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL : 0155 (37) 5501
発行日 令和4年10月31日

自主研修も復活！今年もチャーター機で見学旅行



4日にチャーター機で帯広空港を出発した見学旅行団。昨年度に続き、エア・ドゥ様のご厚意によりポケモン・ジェットでの往復となりました。離陸の際にはスタッフの皆さんが横断幕を持ってお見送り。生徒は初日から、たくさんの方々の支援があって見学旅行に行くことができる喜びをかみしめました。神戸空港へ到着すると、そのまま姫路城へ。数年かけての大補修により、まさに“白鷺城”の威容をたたえた姫路城の迫力に圧倒されました。この日の夜はUSJすぐそばのホテルに宿泊。待ち遠しい気持ちを抑えながらの就寝となりました。

2日目は待ちに待ったUSJ。思い思いのグループを作って夜まで満喫しました。思っていたより待ち時間が短く、お目当てのアトラクションを堪能できたようです。この日は京都に移動して宿泊し、3日目は関西班別自主研修です。大阪に出向く班もありましたが、京都市内の寺

社仏閣をじっくり巡る班、レンタル自転車で颯爽と行動する班、着物体験をして京都気分を味わう班など、思い思いに関西の雰囲気を楽しみました。

最終日は奈良の見学でしたが、残念ながら風を伴う大雨。東大寺の大きさを顔上げて見て欲しかったところですが、傘をさして足元を気にしながらの見学。雨に降られたのが最終日だけでよかった、としておきましょうか。

旅行全体を通して、体調を崩す人もおらず、当初の目的を達成することができました。保護者の皆様をはじめ、今回の見学旅行に尽力してくださった方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

団長 福田 敏 憲

PTA講演会『さらば悲しみの性』

『さらば、悲しみの性 産婦人科医の診察室から』等の多くの著作で知られる医師の河野美代子さんを招いてPTA講演会が13日に開催されました。河野さんは医師になって間もない頃に命を救えなかった自分の無力さを感じ、命の生まれてくる産婦人科医になったと言います。ところが、望まない妊娠、その中でもとりわけ若い人に多い現実には愕然とし、性教育の大切さを感じたのだそうです。文部科学省（当時文部省）監修のDVDを視聴した後、性の現実や中絶とはどういうことか、そして何より命の尊さをお話してくださいました。生徒の感想の中には「相手に対し一緒に考えられる大人になりたい」「“性”ということにあまりにも無知”という言葉が自分の中に響きました」「自分のこととして考えることができました」などの感想が寄せられました。次の日の診察に間に合うようにと講演の後、すぐ東京に戻り、翌朝早くに広島に戻られたということです。本当にありがとうございました。



美術館と連携・対話型鑑賞授業

昨年に続き、3年選択授業「自己表現」で帯広美術館と連携した「対話型鑑賞」の授業を行いました。この方法はニューヨーク近代美術館で開発されたアートの鑑賞法で、自分の感覚に気づき、それを表現する力、さらに他者の想いを受容し理解する能力を向上させるものと知られています。今年も、とかち芸術文化振興機構代表の松井由孝さんから絵画を借り入れ、帯広美術館学芸課長の齊藤千鶴子さんと学芸員の耳塚里沙さんに授業をしていただきました。生徒たちは最初はなかなか自分の感じたことを言葉にできず苦労していましたが、他の人の考えを聞くうちにだんだんと自分の心に浮かんだ印象を素直に言葉にできるようになりました。今回は絵画だけでなく書の鑑賞も含まれ、一層バラエティ豊かなものとなりました。本校、村上教諭の作品を鑑賞する場面もあり、それぞれが興味をもって芸術に触れるよい機会となりました。関係された皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



第25回 3-1担任・書道部顧問 松岡 篤志 教諭

人との出会いにつながる挑戦をしてほしい



◇幼少時代

鉄道の町、新得町に生まれ育ちました。当時は国鉄の官舎が建ち並ぶ勢いのある町でした。今はちょっと寂しくなっていました。教員として初めて十勝に赴任してきましたが、もうこんな年（63歳）だから誰も知らないだろうと思っていたら、生徒たちから「おじいさんの教え子だったそうですね」とか、「先生のことを知っている人がいました」と言われます。何とも恥ずかしい気持ちになるものです。そんな山あいの町で駆け回っていた子ども時代でした。中学になって思っきり部活しようと思っていたら、病気になってしまいました。スポーツは医者からとめられてしまいました。その頃はずいぶん気持ち腐ったものです。そのかわりというわけでもないのですが、音楽にのめり込んでいけます。清水の合唱団のピアノ伴奏なんかしていました。

◇大学時代

東京・渋谷にある大学に進学しましたが、今度はジャズにはまりました。大学には毎日しっかり行くのですが、まあ、バンドしていくようなものでした（笑）。そして夜はアルバイト。バンドやたまに映画のエキストラにでてみたり。沢口靖子さんはきれいだったなあ…。そのうち芸能事務所で石井光三さんに会い、その関係で舞台や歌舞伎、能など多くの芸術に触れることができました。その時のつながりは今でもあって、私の書を展示してくれることもあります。市川染五郎（今は松本幸四郎）丈（注：歌舞伎俳優の敬称）の講演会にも私の書が展示されたのもその時のつながりからです。

◇教員になって

書道は大学でちょっとかじった程度でした。ところが教員として北海道に戻って最初に赴任した江差高校で書道を教えることになってしまったのです。4年後、今度は函館西高に異動でしたが、それでも書道の専任。これでは駄目だと、きちんと先生について書道を習うことにしました。それが34歳の時です。

日本海の町、江差での4年間は本当にカルチャーショックでした。浜の文化というのがあるのですが、何せ北海道で一番先に開けた所というプライドがあります。その昔、北前船で大阪に歌舞伎を見に行ったというくらい町ですから、今も独特の文化を持っています。江差追分を生み出した気候・風土、そして人々の営み。本当にカルチャーショックを受けました。昨年、私の書が日展に入選したのですが、その題材も江差追分からいただきました。

◇自慢できるような人生ではないが

このように私はあれこれ寄り道をしながら生きてきたようなものなのですが、若いときの回り道はあっていいと思っています。今風にいえばギャップイヤーですね。多くの出会いにつながる挑戦を皆さんにもしてもらいたいなあと思っています。

三条高校で輝いている生徒を紹介します。インタビュアーは校長です。

インタビュー

きらり

地域貢献プロジェクト「帯広動物園フェス」を企画

3-5 小谷愛実さん 3-6 倉口遥那さん



8月に実施した「麦音deフェス」に続いて、「帯広動物園フェス」を企画した小谷さん、倉口さん。当日は多くの子どもたちが目を輝かせながら2人が考案した落ち葉アート体験や、折り紙バッジ作りなどの子ども向けワークショップに参加していました。小谷さんは「今回は三条生だけで行

らと考案したのが動物園とのコラボでした」と倉口さん。「授業では商品開発を提案したのですが、実際に満寿屋さんと動物園さんにプレゼンした際に、それでは時間がかかって卒業までに間に合わないということでイベントを行うことにしたのです」と明かしてくれました。二人は本校コーディネーターである長岡さんをはじめ多くの方々への感謝と「まさかこんなことができるとは思わなかった」と言います。二人の本気に大人が本気で応えてくれた結果なのだと思います。将来について小谷さんは「私は自分の進路について迷っていたのですが、このプロジェクトをきっかけに、もっと地域にかかわっていきたく考えるようになりました。大学でも地域貢献について学び、将来的には地域貢献を積極的にしている企業に就職したいと思うようになりました」と話し、倉口さんも「このプロジェクトを通して地元の良さや温かさを改めて感じることで、将来就職するときには戻って来ようかなと思うようになりました」と答えてくれました。そして二人から後輩たちには「まず地域のことをよく知ることが大切だと思います。そのうえで今回ボランティアで来てくれた人や1年で始まっている地域課題ゼミから新しい地域貢献の形がどんどん生まれてほしいなと思います」と今後に期待するメッセージをいただきました。

ワークショップも任されて、大変でしたけれどやり遂げた充実感があります。来てくださった方で三条の卒業生の方に声をかけていただいて、自分たちでこの企画を考えたことを話すと『三条生がこんな風に活躍している姿を見ると嬉しい』とってくださいて自分も嬉しくなりました」と笑顔で話してくれました。倉口さんも従兄弟に充実した企画と自作の看板を褒められたとか。

そもそもこうした動きは2年の現代社会の授業で地域貢献プランを考えたのがスタート。「最初は満寿屋パンとインデアンカレーのコラボを考えたのですが、色々調べると過去にやっていたことがわかって、それな

